

News Letter No.16

Contents

プログラムコーディネーターからのメッセージ ユニット長からのメッセージ GSS教員からのメッセージ
研究インターンシップマッチング交流会 GSS実習報告会の開催 (2017)
GSS履修生の紹介 協力教員の自己紹介 編集後記



プログラムコーディネーターからのメッセージ

寶 馨 防災研究所教授



グローバル生存学大学院連携プログラムは、京都大学の9つの大学院研究科と3つの研究所が連携し、安全安心分野の新たな学際領域である「グローバル生存学 (GSS = Global Survivability Studies)」を開拓することを目指す5年一貫制の博士課程教育プログラムです。

研究インターンシップマッチング交流会について

GSSプログラムではインターンシップや産学連携プロジェクトなどで産業界との交流を進めています。2017年6月26日に、本部構内の国際科学イノベーション棟において、本学の修士・博士課程大学院生を対象とした研究インターンシップマッチング交流会が開催されました。詳細は「研究インターンシップマッチング交流会」をご参照ください。

GSS学内協力教員について

GSSはプログラムの開始から6年を経過し、本プログラムを履修する学生数は修了者を含めて82名(2017年2月1日現在)にのぼっています。GSSプログラムが用意するカリキュラムの実施および学生に対する履修指導に当たっては、これまで特定教員が多大な貢献をしてきましたが、今後のプログラムの発展を目指して広くGSSプログラムに関わっていただける学内の協力教員を募集することになりました。現在までに8名の学内協力教員が本プログラムに参画しております。今回のニュースレターではそのうち2名の学内協力教員について紹介します。詳細は「協力教員の自己紹介」をご参照ください。GSS学内協力教員を希望される方がおられましたら、GSS事務室にご一報ください。

オープンキャンパスin 東一条館について

2017年7月2日に東一条館にて京都大学の5つのリーディングプログラムが集まり「オープンキャンパスin 東一条館」が開催されました。GSSからは塩谷教授(生存圏研究所)がGSSを紹介するプレゼンを行いました。また、展示ブースも開設し、来訪者に

説明を致しました。

GSS総括シンポジウムについて

GSS 総括シンポジウムのプログラムなどは以下をご参照下さい。

<http://gss-sv00.gss.sals.kyoto-u.ac.jp/iam/>

ユニット長からのメッセージ

塩谷雅人 生存圏研究所教授



GSSプログラムでは様々な研究科の教員が連携し、安全安心分野において社会のリーダーとなる人材の育成に向けた幅広い活動をおこなっています。今回のニュースレターでは「教員からのメッセージ」として防災研究所のMORI, James Jiro教授から寄稿いただいていますのでご覧ください。

GSSのユニークな教育プログラム中でもっとも重要なものとして、学生の実習系科目への参加があります。フィールド実習やインターンシップ研修などを自ら計画して実施し、それらを通して学んだ成果については実習系科目報告会での発表が義務づけられています。本年1月には臨時実習系科目報告会、また本年4月には第18回実習系科目報告会が開催されました。その様子については「GSS実習報告会の開催」で紹介しています。

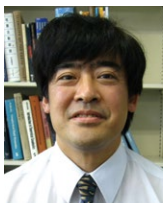
このニュースレターでは毎回GSSプログラム本科生の皆さんの紹介をおこなっていますが、今回は8名の学生さんについて紹介します。GSS履修生の多くは、様々なフィールドで安全・安心に関わる調査・研究をおこなっています。異なる研究科に所属し、分析手段や問題に対するアプローチは様々ですが、フィールドに対する熱い思いは共通するところがあります。各研究科で学ぶ専門知識とGSSプログラムで学ぶ学際的知識によって、社会のリーダーとなるべき人材が着実に育っていることを実感していただけることでしょう。

なお、GSSプログラムの活動内容など最新情報は以下のウェブサイトに掲載されています。

<http://www.gss.kyoto-u.ac.jp/>

GSS教員からの メッセージ

モリ ジェームズ シロウ
MORI, James Jiro
防災研究所教授



防災研究所のGSS活動

京都大学防災研究所は、自然災害を総合的に研究する代表的機関として長年認められてきました。地震、津波、火山、地すべり、暴風雨、洪水、侵食といった重大な自然災害の科学的・技術的・社会的諸側面について、65年以上にわたって研究と教育が続けられています。2011年にグローバル生存学（GSS）プログラムが設立されると、「巨大大自然災害」を主題とする多くの活動については防災研究所の教員が指導し、同研究所の学生がそれらに携わることとなりました。

防災研究所は、GSSプログラムの教育方針と連携して、多様な学術分野の成果を組み合わせる学際的研究の重要性を強調してきました。また、学術研究の成果を実際の減災策に組み込む実用化の重要性を、常に重視してきました。

自然災害研究の一面について述べると、重大な地質災害の特徴のひとつは、それが長い間隔をおいて繰り返し生じることです。例えば、ひとつの特定断層上で大地震が起こる間隔は、通常数百年から数千年です。（2011年の東北地方太平洋沖地震とそれによる津波は千年に一度の事象です。）日本人は、壊滅的な地震に関する報道を耳にすることには慣れています、大地震による大きな揺れを自分で経験することはほとんどありません。こういった希な事象の社会的リスクを適切に伝達する方法を学ぶことは、防災計画・災害対応の責任を担う将来の指導者となる学生たちを教育するにあたって、GSSプログラムの重要な要素となっています。これは難しい問題ですが、GSSの学生たちとの議論によって、以下のような課題を認識してきました。

- ・ 社会は、災害に関する地域の知識と経験を、いかに数百年～数千年にわたって記憶できるか？
- ・ 希に生じる自然災害の社会的リスクについて、その許容範囲とはいかなるものか？
- ・ 希に生じる事象のリスク水準と、災害に強い体制を作る経済的費用とのバランスを、どうとるべきか？

これらの問いに対する簡単な回答は存在しませんが、科学・技術・社会に関する様々な側面についての幅広い理解が、バランスのとれた解決策に貢献し得ることを、GSSの学生たちは認識しています。また、これらの問題に対する国際的な取り組みも重要です。大地震は、一国においては比較的希ですが、世界的には毎年地震災害が発生しています。現在、GSSの学生たちは、多くの国々の出身者と共同研究を行うことの重要性を学んでおり、これによって将来国際

的な規模で減災への取り組みを発展させる基盤を提供することができます。

防災研究所に所属するGSSの学生は、地震、地すべり、洪水、そして環境問題に関する多様な研究課題に取り組んでいます。ここでは、例として2つの研究を挙げておきます。ソン・ジカイさん（Sun Jikai）は、2016年の熊本地震における地盤振動と、益城町の局所的地質の影響について研究しています（図1）。益城町では、日本の地震観測史上最も激しい地盤振動が複数回発生し、甚大な建物被害をもたらしました。これらの強い地動の詳細を理解することは重要です。グ・ボンジュさん（Koo Bonjun）は、モンゴルのウランバートルにおける石炭の燃焼が大気汚染に与える影響について研究してきました。現在、彼は、政府職員、技術専門家、国際組織、また地域住民との会合やインタビューを行い、都市の大気質改善に関する活動への市民の反応と、規制措置の結果について研究しています（図2）。また、ウランバートルの大気汚染を削減する活動に市民および政府機関の双方を関与させるべく、コミュニティを基盤とするリスク管理計画に取り組んでいます。

「巨大大自然災害」分野では、防災研究所におけるこのような個別研究と、GSSプログラムを通して得られる国際的かつ学際的な経験とを結びつけて、広範囲にわたる教育を学生たちに提供しています。



図1 熊本地震（2016年）の地震動について、益城町における固有振動数のピークの推定値。固有振動数のピークはローカルな地質に関連している。左上は、益城町の被害が大きかった地域における倒壊家屋。

図2 モンゴルのウランバートルにおける石炭燃焼量削減のための活動に関するコミュニティ参加型ワークショップ。右上は、ウランバートルの大気質の例。



研究インターンシップマッチング交流会

勝山 正則 GSS特定准教授

産

学協働イノベーション人材育成協議会 (<http://www.c-engine.org/>) は、大学院生の中長期インターンシップをはじめとした産学連携活動の推進を目的に設立された一般社団法人で、京都大学をはじめ14の大学と34の企業が参加しています(2017年6月現在)。GSSとしては、カリキュラムであるインターンシップや産学連携プロジェクト、さらには将来の就職のきっかけを提供できることを目指してこれまでも何度か説明会を開催してきました。履修生からは、参加企業や分野の拡充、インターンシッププログラムの英語対応などを求める声が上がっていましたが特に前者については年々拡充されてきています。

今年度は2017年6月26日に、本部構内の国際科学イノベーション棟において、本学の修士・博士課程大学院生を対象とした「研究インターンシップマッチング交流会」が開催され、GSS履修者11名を含む42名大学院生、15社の企業関係者、教員などの参加がありました(参加企業名は末尾に掲載)。

交流会の第Ⅰ部では、各企業の担当者が自社の紹介、開発研究の現場でどのような知識やスキルが必要とされているか、またインターンシップ生に取り組んで欲しい課題とは何か、などを具体的に説明しました。それに引き続き、学生代表者によるプレゼンテーションが行われました。

第Ⅱ部では学生によるポスターセッションが行われ、GSSからは山本浩大さん(工学研究科・L2)、Namsung Hyejinさん(農学研究科・L2)、Seera Geoginaさん(アジア・アフリカ地域研究研究科・L2)、岡田ちからさん(農学研究科・L3)、Sajid Nisarさん(工学研究科・L4)の5名が発表してくれました(写真1)。ポスターの前では、それぞれの学生が取り組んでいる研究課題について、企業関係者に熱心に説明する姿が見られました。これはいつもGSSで意識している、専門家以外とのコミュニケーション能力を試す良い機会になったものと思います。これに続いて、企業による個別ブース説明会が行われました。各企業の説明や求めている人材について話を聞くと同時に、学生自身の専門的知識や技術を、その企業においてどのように活かすことができるか、熱心に議論する学生たちの姿が印象的でした(写真2)。例えば、GSS履修者のNamsung Hyejinさんは「ミルクの脂肪を構成するタンパク質の免疫機能を探る」という課題に取り組んでいますが、このような知識や技術が、業務とも関わってくる製薬会社のブースでの話が特に印象的だったと話してくれました。このことが直接インターンや企業への就職につながることは容易ではないと思いますが、社会との接点を間近に見ることができたことは、履修生たちに大きな経験となったものと思います。

【参加企業(15社)】

京セラ株式会社、JNC株式会社、株式会社島津製作所、住友電気工業株式会社、大日本印刷株式会社、株式会社竹中工務店、株式会社巴川製紙所、株式会社日本総合研究所、日本電信電話株式会社、パナソニック株式会社、富士フイルム株式会社、株式会社堀場製作所、三菱電機株式会社、株式会社リコー、ロート製薬株式会社



(写真1) ポスターセッションの様子



(写真2) 企業個別ブースでの説明を受ける履修生たち

GSS 実習報告会の開催（2017）

近藤 久美子 GSS特定准教授

第

18回GSS学生実習報告会（表1）及び、修了予定者を対象とした臨時報告会（表2）が、東一条館にて開催されました。

2017年4月25日の報告会では、アジア・アフリカ地域研究・農学・工学・地球環境学といった多様なバックグラウンドを持つ学生（計12名）が、産学連携プロジェクト・フィールドトレーニング・インターンシップ・国際学術交流などを通じて得られた主要な成果を発表し、その後の質疑応答においては、自身の考えを明確かつ簡潔に伝えようとする姿勢が多く見られました（中国・韓国・インドネシア・インド・ウガンダからの留学生を含む、L2：7名、L3：1名、L4：2名、L5：1名、L6：1名）。

また、計6名が参加した1月の臨時報告会では、プロジェクトをはじめとする新規性や創造性に富む活動内容が伝えられました（L4：1名、L5：5名、うち3名は2～3種類の実習に関するプレゼンテーションを実施）。

今年度末までに、更に3回のGSS実習報告会の開催が予定されています。

表1：第18回GSS学生実習報告会（2017年4月25日開催）〈発表者・題目〉

Shishukan Hall (B1F)		
Name		TITLE
Mr. Jikai Sun	Field Training	A Field Survey of the Kumamoto Earthquake Reconstruction
Ms. Miki Yoshizumi	Internship	Internship: Lessons Learnt at Samburu Handicap Education and Rehabilitation Program, Kenya
Ms. Yu Sakuraba	Field Training	Human Ecological Study on the Roles of Fermented Foods in Cambodian People's Well-Being
Ms. Hyejin Namgung	Internship	Internship at SNUCM (Seoul National University College of Medicine)
Ms. Karlina	Internship	Study on the Effect of El Nino on the Drought Events
Mr. Koji Uozumi	Int'l Cooperation Project	The Trainings on Technique for Drying Cassava in Cameroon
Conference Room (1F)		
Mr. Haruka Ueda	Int'l Academic Exchange	Redesigning Higher Education in Japan
Mr. Mahesh M. Gogate	Field Training	Environmental Change and Tank System: The Study of Urban Ecology of the City
Mr. Bonjun Koo	Field Training	Community-based Disaster Risk Management Applying a Workshop Method in Mongolia:Focusing on Air Pollution
Mr. Shohei Komatsu	Field Training	Utilization of Aquatic Animals in Paddy Field Environment in Cambodia
Ms. Georgina Seera	Field Training	The 2017 East African Drought--Experiences from a Suburb in Central Uganda
Ms. Naoko Kimura	Industry-Univ. Collaborative Project	A Collaborative Social Survey on the Status of Enterprises' Business Continuity Plan and Environmental Management: A Case in Sukagawa City, Fukushima Prefecture, Japan

表2：臨時報告会（2017年1月12日開催）〈発表者・題目〉

Shishukan Hall (B1F)		
Name		TITLE
Mr. Takaki Hirose	Int'l Academic Exchange	Managing the International School for Coastal Management in Sulawesi Island, Indonesia
Mr. Hendy Setiawan	Industry-Univ. Collaborative Project	Research Collaboration on Landslide Hazard Assessment Related to Public Infrastructure Damages in Kumamoto Prefecture
Ms. Ai Suzuki	Int'l Cooperation Project	International Cooperation Project
Ms. Eva Mia Siska	Industry-Univ. Collaborative Project	Enriching Existing Education Network with Involvement of Private Network
Ms. Christina El-saaidi	Industry-Univ. Collaborative Project	Social Entrepreneurship and Public Health
Lecture Room (2F)		
Ms. Ai Suzuki	Internship	Internship
Ms. Eva Mia Siska	Int'l Academic Exchange	The 26th IHP Training Course
Ms. Sachi Matsuoka	Int'l Cooperation Project	The International Cooperation Project Implemented with Schumacher College, UK
Ms. Ai Suzuki	Industry-Univ. Collaborative Project	Industry-University Collaborative Project
Mr. Takaki Hirose	Int'l Cooperation Project	Collaboration of Nusa Cendana University and Kyoto University Through Research of Sabu and Raijua Island, Eastern Indonesia

GSS 履修生の紹介

地

震によって引き起こされた地盤工学的災害は、地震後の建物および社会基盤の損傷の重要な要因であることが示されています。そのため、地域規模での地震リスクを考慮したそれらの分析および説明は軽視できません。

私の研究テーマは「地理情報に基づくカトマンズ渓谷のサイズミック・マイクロゾーネーション(地震地域細分化)」です。ネパールの首都カトマンズは活発な地震帯にあり、いくつかの壊滅的な地震が過去に都市を襲いました。現在、ポーリングデータに基づく地盤工学データベース・システムの開発と、液状化評価などの地震災害軽減への活用に取り組んでいます。

GSS 履修生として私は、学際セミナーや授業に出席し、また研究活動が続ける中で、思考方法が個人の視点からよりグローバルなものに変化してきたと感じます。私のビジョンと研究力は、前述したさまざまな活動を通して強化されています。



Kusum Sharma Parajuli
クスム シャルマ パラジュリ

工学研究科
(L2)

発

展に伴う環境問題が深刻化しています。農業生産、食品安全についての議題がどんどん出てきます。農業は国民の生活基盤として、生活や生産の根元に影響しています。特に、発展が比較的遅れている地域の農民たちは、代々継承されてきた農業生産技術を活用するとともに、生産向上のために新技術も導入しています。自分の行為はこの地球にどういう風に影響するのかを考える人はほとんどいません。

私は、環境問題に関心を持ち始めた当初、いくつかの農業生産活動のあるべき姿について、根拠を明確にしないまま考えていました。しかし、関連して議論すべき問題は数多く存在することが後にわかりました。環境保護に対する農民たちの意識を変えることは、農業技術よりも重要なのです。

環境問題は GSS プログラムが注目している問題の1つです。私は農業から出発して、この世界的な問題に貢献できるように、GSS が求める研究者になりたいと思います。



原 少君
ゲン ショウクン

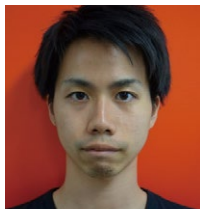
農学研究科
(L2)

私

は京都大学のアジア・アフリカ地域研究研究科に所属し、インドネシアにおける地域研究を行っています。

インドネシアの泥炭に覆われた地域では泥炭火災という大規模な災害が発生していますが、中には火災を生じさせないように努めながら生活を営んでいる人々が存在しています。私の調査地であるトゥビンティンギ島でもそのような人々が住んでおり、私はそこに滞在して彼らの生活を体験しながら、泥炭火災の現状や彼らの取り組みといったデータを集めています。

また、GSS プログラムはカリキュラムに巨大自然災害の分野を取り入れているため、インドネシアにおけるフィールドワーク以外の時間は GSS の講義を受け、研究に関連した知識を深めることができます。この GSS プログラムと長期間現地滞在用フィールドワークを相互に行い、より良い論文を執筆できるよう努めたいと思います。



青木 亮隆
あおき よりたか

アジア・アフリカ地域
研究研究科 (L2)

私

はウガンダにおける女性の肥満について研究しています。肥満は、若年死亡率と身体障害に起因する損失生存年数の増加につながるため、世界の持続可能性にかかわる課題の1つとなっています。ウガンダでは、他の発展途上国と同様に、肥満の予防や治療のための機会是非常に限られており、特に低所得層ではそのような機会を得ることは困難です。

GSS プログラムのカリキュラムは、社会における問題解決の選択肢を生み出すために学術研究の利用を促進するものです。博士課程の研究課題としては、さまざまな利害関係者と連携することで、私の研究現場のような食事介入が有効でない状況にいる女性の肥満管理および心血管疾患リスクの低減における身体活動レベルの増加の妥当性を調査したいと考えています。



Seera Georgina
セーラ ジョルジナ

アジア・アフリカ地域
研究研究科 (L2)

GSS 履修生の紹介

私

の現在の研究では、都市の開発過程および人間の活動に関する言説と、それが天然資源に与える影響について取り組んでおり、主に都市部の地表水域に与える影響について研究しています。都市部の地表水域のネットワークとその役割については、学際的により幅広く研究する必要があると私は考えています。地理情報システム (GIS) ツールを使用し、インドのヴァーラーナシーで現地調査を行うことにより、都市開発と人間の活動が古くからの水域に与える影響を研究するとともに、空間の変容とこれらの水域の一貫した減少について分析しています。

学際的な GSS プログラムにより、水不足、汚染と管理、公衆衛生、そして水害に取り組むための強力な基盤と多様な機会が提供され、私の研究に対して実践的かつ専門的な支援を与えてくれます。



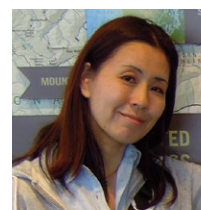
Mahesh Madhav Gogate
マヘーシュ マドフ ゴクテ

アジア・アフリカ地域
研究研究科 (L2)

ア

ジア・アフリカ地域研究研究科博士課程3年次編入生の内藤（磯田）真紀です。この度、GSS のL3年次に編入することになりました。大学院（修士課程）終了後、15年間コンサルタント会社で自然環境調査に携わり、地質や水文など異分野の専門家の方々と、植生調査の技術者として国内外の野山を歩きました。GSSでも学際的な環境を生かし、多くの分野の方と関わることで、双方に良いアイデアや成果を生み出せるのではと期待しています。

私自身のフィールドはミャンマーで、持続的な植生管理を目指した実践方法を模索しています。現地調査に行くときは、息子が小学校の夏休みの間に実家に預けて短期間集中型で調査するなど、様々なハードルがありますが、これまでの経験を生かせる部分も多いので、皆様と一緒に楽しみながらプログラムに参加したいと思います。



内藤（磯田）真紀
ないとう（いそだ）まき

アジア・アフリカ地域
研究研究科 (L3)

A

SAFAS入学前は、アジア開発銀行のプロジェクトや国際労働機関のプロジェクトの外部コンサルタントとして、アジアにおける移民労働者と家庭内労働者の問題に取り組んでいました。

学位論文に向けて、フィリピンケアワーカーに対する日本の移民政策に焦点を当て、アジアにおける移民労働の動態を分析しています。看護とアジア研究における経験を踏まえ、移民、高齢化社会、ケアのグローバル化、そしてケア労働といった視点でこの現象の理解を目指しています。現在、関西地方の介護施設でボランティア活動に従事しており、この活動を通してフィリピン人ケアワーカーと日本人高齢者の間のケアの力学を観察しています。

GSS プログラムでは、日本においてケアと移民をめぐる政治経済を支配し形成している人々、構造、そしてシステムについて分析し、アジア諸国における移民政策の立案に貢献することを計画しています。



Katrina San Juan Navallo
カトリナ サン フワーン ナボーロ

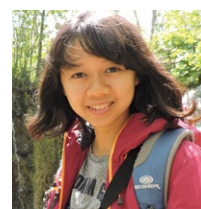
アジア・アフリカ地域
研究研究科 (L3)

私

は人生の早い段階から環境関連活動に携わってきました。

そこで、私は、環境と人とのつながりに役立つことができると考えて、学部では環境工学を専攻しました。修士課程での研究テーマは、持続可能資源管理に関することでした。これを通じて気候変動に対処するには多くの方法があることに気付きました。その結果、私の修士論文課題は炭素隔離になりました。このテーマは、まだインドネシアでは広く研究されていないことに気付きました。したがって、私は博士課程の研究としてインドネシアの土壌における炭素隔離に関する研究を続けています。私は、土壌中の炭素隔離を管理するためにある種の適応的实践がどのように役立つかを知らずのテーマとして伝統的な実践を選択しています。

私は、GSS プログラムの学際性が伝統的な実践の社会的側面とのギャップを埋めるのに役立つかもしれないことを見出しました。また、さまざまな背景の多くの専門家や仲間の学生と交流することで、より多くの知識と経験を得ることができると信じています。これは、私の博士課程の研究だけでなく、将来のキャリアにも役立ちます。



Annisa Satwika Lestari
アニッサ サトウィカ レスタリ

地球環境学舎
(L3)

協力教員の自己紹介



ピラル スギモト

S.Pilar Suguimoto

医学研究科附属医学教育・
国際化推進センター
講師

私

はペルーで生まれ育ちましたが、私の祖父母は日本で生まれました。そのためこの国には大変愛着を持っています。ペルーで医科大学を卒業後、京都大学で医学博士号を取得し、現在同大学で講師を務めています。医学教育・国際化推進センターに所属するとともに、社会健康医学系専攻社会疫学分野にも関わっています。教育者としては、学部および大学院で日本人学生と留学生を対象に教えています。

研究について、私の関心の中心は医療へのアクセスにあります。人々の健康は、人々自身の発展、社会、さらには居住する国にとっても不可欠ですが、技術の飛躍的な発展にもかかわらず、医療格差は未だに蔓延しています。予防的ケアを含め、ケアに対する人々のアクセスには、多様な要因が影響を与えています。私が公衆衛生学に魅力を感じるのは、疾病の予防および健康の増進に焦点を当てる学際的な方法が求められるという点です。なぜなら、人の健康には、個人、人間関係、組織、共同体、そして政策に関する諸要因が、さまざまな水準で影響しているからです。

私は2017年4月にGSS協力教員としてメンバーに加わりました。このプログラムに貢献できるのを楽しみにしています。元大学院留学生ですので、留学に伴う困難をよく理解しています。また、社会健康医学系専攻での経験から、学際的研究の価値を学び、その重要性を認識しています。GSSの学生は、このプログラムで学ぶという特別で比類のない機会に恵まれています。この機会を最大限に活かすよう、皆さんにお奨めします。科学についての異なる見解に耳を傾け、自らの研究内容について議論し、新しい発想を手に入れ、友人を作り、そして何よりも、楽しんでください！

2

2017年4月よりGSSのメンター教員に就任しました。私のメインの所属は防災研究所で、防災投資や災害時の危機対応といった問題について、意思決定や社会的制度の視点から研究を行っています。私は防災という研究テーマに携わる者は、災害から少しでも人々の生命や財産を守ることを企図して研究に取り組みなければならないと考えています。当たり前のようですが、自らの研究が研究のための研究になっていないか、世の中の誰にとって意味があるものかを自問自答するように心がけています。

研究者は、専門的知識体系に基づいて、対象とする問題を掘り下げて分析します。その際、「こうした方が良い」と人々に訴えかけるとき、そこには何らかの価値基準が陰に陽に存在しています。一方、社会には多様な価値観をもった人々が存在します。そのため、研究者が自らの専門知識の枠組みのみに依拠して正当性を主張すれば、それは単なる押しつけということになってしまう恐れがあります。世の中に真に役立つものを提供するためには、視点を一歩引いて、自らの価値基準と他者の価値基準を相対化して客観視する必要があります。

GSSでは、自身がリーダーシップを発揮し、社会問題を解決しようとする事が求められます。したがって、GSSで学ぶ者は、まずは研究対象とするフィールドにおける人々の考えや価値観に関心を払うことが大前提だと思います。決して押しつけ的な態度ではなく、謙虚な姿勢で人々に接し、相手に受け入れてもらえるような形でより良い方向に向かうように働きかけていくことが肝要だと思います。「言うは易く行うは難し」で、私もうまく行かず悩むことも多いですが、時間をかけて粘り強くやり続けるしかありません。皆さん、共に頑張りましょう。



大西 正光

防災研究所／防災研究所
附属巨大災害研究センター
准教授

編集後記

GSS プログラムが文部科学省からのサポートが受けられる最終年度となる本年度も、新たに9名のL1生、3名のL3編入生を迎え、8月1日に入学式を執り行いました。彼らには今後5年間、あるいは3年間のGSS生活が待っているわけですが、これまでの学生と比べても金銭的支援が十分にできない可能性が高い中、真にGSSに魅力と価値を認めて参加してきたものと考えています。充実したGSS生活を楽しみ、やがては安全安心分野において社会のリーダーとなる人材に育ってくれることを期待しています。

GSS ニュースレター (No.16) 編集担当 勝山正則

京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
Inter-Graduate School Program
for Sustainable Development and
Survivable Societies
Newsletter No.16

平成29年11月1日発行

編集 京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
ニュースレター編集委員会

発行 京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
京都大学学際融合教育研究推進センター
グローバル生存学大学院連携ユニット
京都市左京区吉田中阿達町1
TEL 075-762-2197
URL <http://www.gss.sals.kyoto-u.ac.jp/>